



Title	日系ブラジル人のトランスナショナルな生活世界：第1章 出稼ぎ・帰国・再出稼ぎの現状と問題点
Author(s)	飯田, 俊郎
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 21, 15-22
Issue Date	2006-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/22657
Type	departmental bulletin paper
File Information	21_P15-22.pdf



第1章 出稼ぎ・帰国・再出稼ぎの現状と問題点

第1節 出稼ぎ・再出稼ぎの目的

1980年代半ば以降のデカセギ現象は、ブラジルの日系新聞紙上において、日系社会の解体と日系人の社会的地位の低下を憂える言論を巻き起こした。日系社会のリーダーたちは、①子どもの教育への投資を重視する生真面目な家族の生活設計が放棄され、②出稼ぎをきっかけに家族・親族・職場および日系社会の人間関係から離脱する者が増加し、③これまでブラジルの発展を支えてきた「模範移民」としての評価が損なわれることを憂慮し、対抗策を講じてきた。

一方、日本では、ブラジル人の資格外就労・不就学・非行・犯罪が発生したが、ある日系社会のトップリーダーはこれらの社会問題について、「日本の企業・自治体・政府が招いたから出稼ぎ者が出現したのであるから、日本における問題の解決はそちらの責任だ」という議論を展開した。しかし、今回のブラジル調査で印象的だったのは、このリーダーが、フォーマルなインタビューの席を離れてから語り出した、もう一つの本音であった。

結局この問題は、出稼ぎ者とその家族自身の問題であり、本人たちが日本で解決しなければならない問題なのだ。実際、ブラジルに移民した先輩たちも、私たちもそうしてきたのだから。

日系移民は、戦前・戦中・戦後の混乱期になし崩しの定住化を余儀なくされながら、ブラジル各地に日系社会を形成し、このネットワークと教育を足がかりに自営業とホワイトカラーという新旧のミドルクラスの地位を築いてきた。この連帯感と勤勉性を日本のブラジル人に再び期待する「模範デカセギ」の言説も存在するが、かつての日系移民と今日の出稼ぎ者では大きく事情が異なっている。日本の景気低迷によって滞在期間は長期化したものの、多くの出稼ぎ者とその家族がブラジルに帰国し、あるいは再び出稼ぎを繰り返しているのである。

梶田孝道・丹野清人・樋口直人は、今日の外国人集住地における業務請負業を通じた大量の不安定雇用の常態化を「顔の見えない定住化」と呼び、出稼ぎ者が長期的な適応戦略を立て、地域ごとの移民コミュニティの担い手となるように誘導する統合政策の推進を提言した（梶田・丹野・樋口2005）。その内容は、①参政権の付与、②自文化を保持する権利の保障、③雇用保険と社会保険の全額事業者負担による安定雇用といったものである。しかし、「顔が見えない」のは、雇用が不安定なためだけでなく、帰国・再出稼ぎを繰り返すブラジル人自身が日本への定住意思を持っていないからである。政治的権利が勝ち取るもので、コミュニティが創り出すものである以上、切実に望まれていない理想の実現は困難である。

ここで、ブラジル政府からの資金提供を受けた「零細中小企業支援事業団（Sebrae）」からの委託で、パラナ州の州都クリチーバ市の「ブラジル出稼ぎ協会（ABD）」が2003年から2004年に実施した調査の結果を参照する（表1）。回答者は、①日本への出稼ぎを予定している244人（16.3%）、②日本に出稼ぎ中の322人（21.5%）、③出稼ぎから帰国した935人（62.3%）の合計1,501人であった（なお、①の出稼ぎ予定者のうち、これまでに日本に行った回数は、0回が男性の47.0%・女性の52.3%、1回が男性の22.0%・女性の27.0%、2回が男性の14.9%・女性の12.4%、3回以上が男

性の16.1%・女性の8.3%であった)。

この調査では、①②③のカテゴリー別・性別に出稼ぎの目的が尋ねられているが、全体的に見て順位が高いのは、住宅・自家用車・電話加入権の購入などを意味する「生活の改善」で、これに、「ブラジルでの起業」のための資金を貯めることと、ブラジルでの「収入・給料への不満」が続いている。「ブラジルでの起業」は、①②③のいずれのカテゴリーでも男性がより強く希望している。また、②出稼ぎ者は、「ブラジルでの起業」以外の目的が他のカテゴリーよりも弱くなっている。①出稼ぎ予定者が出稼ぎに多くの期待を持ち、③帰国者が達成感を持って出稼ぎの日々を振り返るのに対し、②現在出稼ぎ中の者は最も重要な課題に気持ちが集中しているのではないだろうか。②に一定数のリピーターが含まれていると仮定すれば、彼らの場合、これまでの出稼ぎで他の目的をある程度達成し、残された起業の夢を叶えようとしている、との解釈も成り立つ。いずれにしても、出稼ぎ当初の優先課題は「生活の改善」で、最終的な課題は「ブラジルでの起業」なのである。

表1 出稼ぎの目的 (%)

	①出稼ぎ予定者		②出稼ぎ者		③帰国者	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
1) 失業を逃れる	25.0	27.7	9.5	4.9	26.0	16.9
2) 収入・給料の不满	47.4	49.0	17.4	15.9	35.7	29.1
3) 生活の改善	69.3	63.4	47.5	40.6	61.7	58.6
4) 日本での投資	2.6	0.6	1.7	0.7	1.5	1.9
5) 家族に同行	12.2	21.7	11.3	28.8	11.8	21.4
6) ブラジルでの起業	48.7	35.9	46.2	28.1	41.0	27.3
7) 家業を助ける	8.4	8.7	7.5	5.9	13.2	11.7
8) 職業経験を積む	11.5	10.6	12.1	5.7	6.9	6.4
9) 家族を支える	29.5	23.3	20.9	16.0	20.3	17.9
10) 日本を知る	25.7	32.3	17.5	15.1	35.6	41.4
11) 日本に定住	3.8	4.5	1.7	4.0	1.1	0.5
12) 学資を貯める	25.6	27.1	6.6	15.0	14.4	13.0
13) 借金の返済	8.9	7.6	6.6	15.0	10.7	12.6

(Sebrae & ABD, 2004, “Dekassegui : Empreendedor e Cidadão” から作成)

また、ブラジル在住者のうち、①出稼ぎ予定者と③帰国者は、回答傾向が似通っているが、より細かく比較すると、①のほうが「収入・給料の不满」と「学資を貯める」の割合が高く、③のほうが「日本を知る」の割合が高いことがわかる。①については、低収入の問題を学歴の向上による職種の転換で解決しようとする意識が読み取れ、③については、一度日本を自分の目で見てみたかったが、もう十分納得したという意識が読み取れる。

第2節 ブラジルでの起業の難しさ

1990年の入管法改正による大量流入が1993年頃にいったん収まると、ある程度の資金を蓄えた者が次々とブラジルに帰国する一方、思いがけない収入減により滞在を長期化し、ブラジルから三世

や非日系配偶者を呼び寄せる者も増えてきた。このころ斡旋会社からの広告を連日掲載していたブラジルの日系新聞紙上では、出稼ぎを否定する論調にかわって、「模範デカセギ」が日本でブラジル人の評判を高め、ブラジルに帰った出稼ぎ者が日系社会に貢献することを望む論調が目立つようになった。

筆者は1993年の8月と、1994年の12月から1995年の1月にかけて、サンパウロ州とパラナ州の日系人集住地を訪問し、帰国者がどのように資金を活用しているかを尋ね歩いた。そのねらいは、ブラジル本国で自営業を起業した帰国者を発見し、インタビューすることであった。そして、パラナ州マリंगा市の喫茶店とバストス市のパン店、サンパウロ州レジストロ市の総菜店とイタペチニンガ市の中古家具店の4名の経営者にインタビューすることができた。しかし予想に反して、該当者の発見は難しかった。その代わりに筆者が出会ったのは、住宅や自家用車を購入し、電話を設置するなどして貯金を使い果たし、元の職業に戻ることもなく暮らしている多くの帰国者たちであった。

日本労働研究機構研究所が行った追跡調査によると、日本への出稼ぎが「2回以上」とするリピーターは、1993年には16.3%であったが、1998年には34.0%に倍増していた（労働政策研究・研修機構のホームページを参照）。筆者がブラジルを訪問したのは、多くの帰国者が「生活の改善」のために消えて行く預金残高を眺めながら、元のような仕事に就いてブラジルに留まるべきか（同じ職場への再雇用は難しいが）、再び日本に行って「ブラジルでの起業」の資金を貯めるべきかを逡巡していた時期だったのである。

1993年のブラジル滞在中に耳にしたのが、零細中小企業支援事業団（Sebrae）が帰国者に対する起業のコンサルタント業務に本格的に乗り出す、というニュースであった。この情報を聞いたのは、アイスクリーム店・パン店・青果店・養鶏場などの起業のコンサルタント業務を行っている、パラナ州マリंगा市の銀行支店であった。しかし、この支店の担当者は、自営業の経験が乏しい帰国者による起業の成功率の低さから、Sebraeの事業の成功にも懐疑的であった。

現在Sebraeは、2005年から4年間で310万ドルの補助金を米州開発銀行から受けて、ブラジルの経済とビジネスの情報を世界各地で働く約200万人の出稼ぎ者に発信し、さらに出稼ぎ者の帰国後の起業を支援する「デカセギ起業家プロジェクト」を推進している。このプロジェクトをクリチーバ市で実行しているのがABDである。ABDの前身は、クリチーバ市周辺の出稼ぎ者への教育・医療・就職・法律などの支援を目的として1997年に発足したボランティア団体であったが、インターネットや電話を通してブラジル全国からの相談に応じるようになり、2000年には地域色を感じさせない「ブラジル出稼ぎ協会（ABD）」に改称した。ABDは帰国者と出稼ぎ予定者を対象とするあらゆるサービスを展開してきたが、2003年のSebraeからの委託調査をきっかけに、調査事業と起業支援事業を拡大することになった。ABDのスタッフは、帰国者による投資と起業の実態について次のように説明した。

使い道について、まず言えることは、この15年の間に色々なことが変わったということですね。15年前（1990年頃）は毎月、いい金額が稼げたのですが、最近ではあまり稼げなくなったということが一つあげられます。使い道についてですが、日系人たちはどちらかというとお金の使い方というか投資の仕方が保守的なのですね。それを一言で言うのなら、彼らは無難に家を買う。まあ、不動産を買うのですね。これが典型的な投資のパターンだったのですが、実は、これはもう

行き詰っているのですね。買ったかった人はもう買ってしまっているわけで、これ以上、伸びる見込みは無いわけですね。もう一つ、多くの人が投資したのが、ビジネスを起こすということですね。その、ビジネスを起こすというのも、成功したごく一部の人たちがいて、失敗した大多数の人たちがいるわけです。



ブラジル出稼ぎ協会（ABD）のスタッフ

しかし、起業が必ずしも成功しないのは当然のことである。では、帰国者による起業の失敗率はやはり高いと言えるのだろうか。

成功した人もいるし、残念だった人もいますね。日本から送金しても、兄弟にやられた人もあるし、息子にやられた人もあるし、父や奥さんにやられた人もあるし、あらゆることがありますよね。

家族との関係が難しいのです。あらゆる面でボロが出てきますからね。ブラジルの今の経済状況では、何をやっても失敗する可能性が多いのですね。小さい企業だったら、Sebraeの数でいくと2年以内に70%くらいは成功しないのです。

（通訳者が引き継いで）彼女が強調しているのはブラジルでビジネスを始めて成功しないという、いわゆる成功率なり失敗率というのは、けっして出稼ぎ帰国者が極めて高いということではなくて、ブラジル全体と比例しているのです。出稼ぎに関係なくブラジル国内での起業された9割が潰れるというデータがあって、それを、Sebraeが活動をスタートさせてから何とか7割に失敗率を下げたのだけれども、それでも7割です。

7割の失敗率は必ずしも高くないとのことだが、日本での厳しい出稼ぎ生活の見返りとしてはやはり大きな痛手を被ったことになるだろう。起業に失敗した多くの帰国者にとって、再出稼ぎは手取り早いリターンマッチの手段である。

私が思うには成功しているというか、うまくいっている2種類の人たちがいますよね。まず、ブラジルに腹を決めて戻ってきて、多少苦勞はしてもブラジルで踏ん張って頑張っている人たち、それと、同じように日本にいと腹を決めて、子どもも日本の公立学校に通わせて、とにかく日本に長くいるのだと生活設計をしている人たち。そして上手くいっていないのが、行ったり来たりを繰り返している人たちであって、そういう人たちが失敗しているとは、私は断定したくはないのですが、でもかなり苦勞を重ねているということは、誰もが認めていると思うのです。

やっとの思いで購入したマイホームを親族に預け、あるいは他人に貸して、帰国者は日本へと戻ってくる。そしてブラジルに帰国し、起業し、失敗する。しかし、起業への挑戦者が次々と現れることによって潤うビジネスが存在することも事実である。1980年代に移民受入国からデカセギ送出国

に変貌したブラジルとしては、出稼ぎ者が送金し続けても、起業して成功しても失敗しても、金が循環さえしていればそれで良いと言える。むしろ、出稼ぎ者の家族すべてが日本社会に定住し、本国への送金と投資が途絶えることが、ブラジルにとっては最大の損失なのである。その意味でトランスナショナリズムは、出稼ぎ者以上に政府にとって必要な生活設計なのである。

第3節 ブラジルでの就職の難しさ

出稼ぎの目的を調べた表1をみると、少ないながら「学資を貯める」「職業経験を積む」という回答があり、出稼ぎ者のすべてが起業を目指しているわけではないことがわかる。サンパウロ市ではこのような希望を持つ失業者を集め、職業キャリア形成のためのセミナーを開催し、就職先を紹介するNGOに、インタビューを行った。

1999年の10月に発足した「タダイマ・プロジェクト」は、現在、サンパウロ市東洋人街のリベルダージ商工会議所で月1回のセミナーを開催している（タダイマ・プロジェクトについては、本報告書第3章も参照）。ここには毎回約250人の失業者が集まるが、そのうち70%が日系・非日系を含めた一般の失業者で、30%が元出稼ぎの失業者である（この帰国者に関する事業を「タダイマ・プロジェクト」と称している）。セミナーの第1部は就職状況についての1時間半の講演で、第2部は就職活動に臨むためのモチベーションについての40分の講演である。その後、あらかじめ履歴と希望職種を登録してある参加者に対し、約30名のボランティアが15～20分の個別面接を行い、約30社の求人募集とのマッチングを行い、紹介状を発行するという手順になっている。



タダイマ・プロジェクトのセミナー

者に伝えられるメッセージは、次のようなものだという。

このNGOが日系人の帰国者だけを対象にしないのは、人種差別の批判を受けないための措置であり、帰国者に対しては2週間後に専用のミーティングが開かれている。参加者は当初の半分ほどに減少して約30～50人くらいになるが、話の内容を帰国者の心理面の問題に絞ることができ、互いに個人的な悩みを話し、情報交換をすることが可能になる。このミーティングで帰国

みなさんご存じのようにブラジル人が日本に仕事に向かって、平均5年か8年間、日本で仕事をしています。早い話が本当に失礼にあたりますけれど、その5年か8年の期間にあまり能力が必要ない仕事をやっています。工場の中や弁当屋の中で、ですね。そのためあまり新しいスキルを覚えることはできない。

そしてもう一つは基本的な問題なのですが、日本に向かう出稼ぎの方たちはやっぱり教育の問題があると思います。日本に行っても5年か8年日本で生活しても日本語は勉強しない、他の語学、英語も勉強しません。それで情報システムでも例えばPC、ウィンドウズとかそういう

知識も勉強しないで戻ってくる。そして、標準語のポルトガル語もろくに話せない。そして自動的な仕事をしていたのでブラジルの会社で仕事ができるスキルはもっていない。そういう状態で戻ってくるわけなのですね。

はっきり言えばブラジルで仕事をしたければ、ITを勉強してくれということですね。大学を卒業していなかったら短大でもいいから勉強しなさいと。日系企業で仕事をしたければ日本語のベースは一応もっていますので、日本語の勉強をして下さいということです。大学を卒業しなくても短大とか、高等学校、専門学校に通ってメカニクの勉強をすとか、電気の勉強をすとか、あるいは美容師の勉強をすとか、資格取得の為の講座をどこかで受けて成功して下さい。

この趣旨についていけない人は、工場などで出稼ぎのときと同じような職種に就き、日本の3分の1の給料で働かなければならないが、それならば再び出稼ぎに行くほうが合理的である。しかし、ここに集まるのは、そのような意欲さえなくなりかけている人たちである。モチベーションに関する問題は次のように説明される。

事業をやっただまされた、パートナーに騙された、それが色々多いのですね。出稼ぎでお金を持っていることをわかっていて、うまくそれを利用して騙されて、全部お金を無くした。パートナーに騙された、社員に騙された、結論から言うと事業に失敗した。事業家になる準備が出来ていなかったのですね。それで、ビジネスが失敗してまた借金して、しょうがないから日本にまた戻る。あるいは2、3年、就職を探したけれど見つからなかった。ですから、すごく個人的なネガティブなインパクトを受けるわけなのです。日本で大変な経験を味わってブラジルに戻って、ブラジルでも将来性がない方たちが我々のところに来る。道を失っている方たちとか、全然エネルギーが無い方たちとか、夢も作ることができない。夢があってもそれがつぶれてしまって、家族もぐちゃぐちゃになっていると。

そういう方たちに何とかしてエネルギーアップやモチベーションアップをして、自分が日本で経験したことをブラジルで活かして、家族と一緒に生活していきましょう。どういう方法かと言うと、事業家になる、あるいは収入を低くしてもブラジルでこつこつやって、段階的に自分のブラジルでの人生を立て直していきましょう。

出稼ぎについて「ハズレなしの宝くじ」という表現があるが、宝くじの大当たりと同様に、人生設計が狂ってしまう人、元の生活には戻れなくなる人、人間関係が崩壊してしまう人が続出している。このような相談にボランティアとして対応しているNGOにとって、トランスナショナリズムはけっしてお勧めできる生活設計ではない。

第4節 リピーター問題の相対化

「模範移民」の日系ブラジル人が到達したミドルクラスの地位にたどり着けなかった人々や、その地位からふるい落とされた人々にとって、出稼ぎは起死回生のチャンスであり、繰り返し引くことができるカードである。しかし、ひとたびこのサイクルに入り込むと、経済的・社会的・精神的な混乱が待っており、自営業やホワイトカラーというゴールに到達することは困難である。長期的な生活設

計を、しかも家族全員を豊かにする生活設計を描くことができなければ、出稼ぎなどすべきではない。

しかし、これをもって出稼ぎを完全に否定することができるだろうか。出稼ぎ前の生活が帰国後の生活よりもまじだったと言えるだろうか。夢のない生活を送るよりも、チャンスに賭けることができるだけ幸運だとは言えないか。祖先が生まれた日本で暮らすことが一度でもできるだけ幸せだとは言えないか。日系社会のリーダーの中には、出稼ぎ者がこのような発想の転換を経て、先達を敬う気持ちに目覚め、故郷の日系社会の一員として活躍することを望む人もいる。そもそも自分たちは、この何倍もの苦労を重ねてきた移民の子孫ではないか。これでようやく一世の苦労と偉大さが理解できた、と。実際このような言葉は頻繁に出稼ぎ者の口から聞くことができる。しかし現実には、帰国者が日系社会の担い手として活躍しているという話を聞くことは稀であり、まったくの期待はずれだったと語る日系社会のリーダーがほとんどである。

もう一つの考え方は、トランスナショナルな生活設計の可能性をあえて肯定することである。繰り返し国境を越えて移動するトランスナショナルな生活は、適切なタイミングで適切な土地での生活に投資することを可能にする。現在、帰国者がブラジルであまり成功していないとはいっても、それは昨今の両国の経済状況の条件下のことであり、これがまた違う状況になれば別の展開が期待できるかもしれない。ABDのスタッフが指摘するように、リピーターの中には「15年前は良かった」との声もある。より短期間により多くの資金を貯めることができれば、繰り返し失敗を重ねながら起業の経験を積んでいくことも可能であろう。Sebraeの発表によれば起業の3割は成功しているのではないか。名古屋大都市圏を中心に日本の景気が回復するなか、このような発想をする出稼ぎ者は増えていると考えられる。

しかし、樋口直人は子どもの教育問題が、トランスナショナリズムの最大の弱点であり、彼ら自身が主張する統合政策にとっての最後の難問でもあると言う（梶田・丹野・樋口 2005：300-302）。樋口はその解決策として公教育におけるバイリンガル指導と、質の高い教育を提供するブラジル人学校への助成による学費の低減を主張する。筆者はこれに加えて、ブラジルの初等・中等教育レベルの習得を認定する検定試験（この試験について詳しくは、本報告書第3章を参照）に、日本語を入れることを要求すべきだと考える。

今回、我々はパラナ州教育委員会を訪問し、18歳以上が受験できる中等レベル（高校卒業程度）の検定試験について伺った。ブラジル教育省はこの試験をブラジル国外では日本だけで実施しており、問題の作成と試験の実施をパラナ州教育委員会に委託している。出題範囲はパラナ州内の高校レベルの教育内容を基準としており、言語の分野にはポルトガル語とブラジル文学と英語が含まれている。筆者の提案に対し、パラナ州教育委員会の担当者は、パラナ州の基準と同程度の学力を認定する試験である以上、日本語が入ることはありえないと答え、また、日本在住のブラジル人の子どもが一番苦しんでいるのが日本語であることから、子どもたちにとってもメリットがないと答えた。しかし、海外帰国子女の独自の能力を育て、経験を活かすことは、ブラジル社会にとっても価値のあることではないだろうか。また、日本語が試験に組み込まれることによって、子どもたちの日本語の学習意欲も向上するのではないだろうか。

以上の議論はいずれも客観的なデータに基づいて検証されたものではないが、出稼ぎ・帰国・再出稼ぎの問題については、長期的な観察と複眼的な思考が必要であることを示すことが本稿のねらいである。

参考文献

梶田孝道・丹野清人・樋口直人, 2005, 『顔の見えない定住化——日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会。

日本労働研究機構研究所, 1998, 「日系ブラジル人の日本での就労に関するアンケート調査」の概要 (http://www.jil.go.jp/happyou/980907_01_jil/980907_01_jil.html)。日本労働研究機構研究所は、独立行政法人 労働政策研究・研修機構の前身である。

Sebrae & ABD, 2004, “Dekassegui : Empreendedor e Cidadão” .

(飯田俊郎)